

PGT-A における初回移植不成功の検討

中岡義晴、森本真晴、矢嶋秀彬、太田志代、北山利江、山内博子、勝佳奈子、門上大祐、森本義晴

【目的】 着床前胚染色体異数性検査 (PGT-A) を日本産科婦人科学会 (日産婦) は臨床研究として実施可能としている。胚に高頻度に認められる染色体異常が、生殖補助医療の治療成績に深く関係していることより、PGT-A による妊娠率および流産率改善の効果に期待が寄せられている。一方で、染色体正常胚の移植においても妊娠に至らない場合には、胚以外の不妊要因の存在も考えなければならない。今回胚移植が可能であった PGT-A 症例の初回および 2 回目以降の胚移植による臨床成績を検討した。

【方法】 2020 年 1 月より 2021 年 6 月までの間に、日産婦の臨床研究下で PGT-A を実施し、胚移植に至った 28 例を対象とした。すべての症例は遺伝カウンセリングの後に、インフォームドコンセントを得て PGT-A を実施した。反復 ART 不成功の 17 例 (不成功群)、反復流産の 8 例 (流産群)、均衡型染色体転座の 3 例 (転座群) に対して、臨床成績を検討した。

【成績】 初回胚移植の妊娠率は、不成功群が 64.7% (11/17)、流産群が 87.5% (7/8)、転座群が 100% (3/3) であった。妊娠に至らなかった 7 症例のうち、2 回目以降の胚移植を行った 4 例はすべて不成功群であった。2 回目以降の胚移植合計が 8 回、妊娠が 2 回で妊娠率は 25% (2/8) であった。3 回目以降の胚移植を行った 2 例のうち 1 症例は Th1/Th2 高値の改善がタクロリムスでなく、柴苓湯により認められ、5 回目で妊娠が成立した症例であった。20 例の妊娠のうち、流産は流産群の 1 例 (5%) のみであった。

【結論】 胚移植可能な PGT-A 症例における初回胚移植の妊娠率は良好であった。ただ、初回胚移植で妊娠成立しない場合には 2 回目以降の妊娠率は低く、十分な着床障害検査および治療を行うことが必要と考えられた。また、妊娠に至らない難治性不妊症例が存在することもわかった。